中国に関する歴史学と地域研究

並木頼寿
（東京大学大学院総合文化研究科）

はじめに

現代中国学の新しいパラダイムをめぐるシンポジウムに参加する機会をえて、中国研究における歴史的な過去の状況について、私見を述べてみたい。筆者は東洋史学を学ぶことから中国の近代史を研究課題とするに至ったが、地域研究（地域文化研究）を標榜する専攻に所属して仕事をすることとなった関係で、地域研究と歴史学の関わりについて、考えさせられる機会に恵まれたかもしれない。歴史学（東洋史学）の方法によって、中国近代史を研究する作業と、地域研究の方法によって中国を研究対象とし、主として近代の歴史的な過去の事象に焦点を当てることのあいだには、なにがしか違いがあるように感じられる。その違いにはどのような意味があるのだろうか。

中国学・シノロジー

約百年ほど前に、日本で東洋史学という学問領域が形成されたとき、当時の西洋における歴史学の方法を導入することが目指されたこと、そして、そうした新しい方法を用いることによって、伝統的な漢学の影響力を排除し、新たな研究課題を設定して新たな成果を得ようとしたこと、これらの点については、すでにくりかえして指摘されてきたことがらである。

しかし、当然ながら東洋史学は必ずしも中国を研究対象に限るものではなく、むしろ中国の周辺地域に強い関心を注ぐことが多かったようである。そこで、漢学の流れをも継承しつつ、中国を主要な研究対象とする中国学（当時の用語では「支那学」が一般であった）が別に形成されるということがあった。内藤湖南の学問がその代表であろう。

これは、西洋において、近代歴史学の形成と並行して、１８世紀末から１９世紀に「シノロジー」の形成が見られたことと似ているかも知れない。その際に留意すべきなのは、近代歴史学は果たして中国を含む非ヨーロッパ地域を、研究領域に含めていたのかということである。なぜヨーロッパではシノロジーが形成され、日本では東洋史学が構想されたのか、もう一度考えてみたい課題である。

中国における歴史の発見

ちょうど中国で１９８０年代の民主化運動が注目され、１９８９年の天安門事件が発生する時期に、中国における社会変動と連動するかのように、アメリカの中国研究学界から、

「中国における歴史の発見」という問題提起がなされた。同時期に日本で中国近代史の従来の研究方法に疑問が提起されたことと通じあうことがらであった。

数千年におよぶ膨大な歴史を誇る中国に、今になって改めて「歴史の発見」を試みるという問題提起は、近代歴史学が中国を研究対象に含むかたちでは形成されなかったということの自白のようである。さらにまた、西洋起源の歴史学的な方法を中国に適用しようとした東洋史学の試みをも、この「中国における歴史の発見」という問題提起はおびやかすものであったかもしれない。ただそれでも問題となるのは、研究方法そのものを中国に「発見」するのかどうか、ということであった。

展望

地域研究の場合も、従来の研究においては研究対象地域を研究する方法を、対象地域に求めるということはなく、対象地域から見れば外在的な観点から分析が行われるということが当然であった。そもそも地域研究は、研究主体が所属しない地域を外在的に研究することを使命として成立した方法であるから、上記の事情はまったく当然のことなのである。

しかし、今後このような地域研究の方法は改められなければならないだろう。東洋史学の方法も、根本的に、外在的な学問的方法を「東洋」に当てはめようとしたものであった。それでは、今後、「シノロジー」や「支那学」の方法にもどるべきなのであろうか、さらには、中国文化に固有の「漢学」の方法に新たな可能性を発見するというようなことが考えられるのか、議論が求められるところである。